

「シンガポール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科 修士1年 佐藤 里保

以下において、「シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラム」に関して、1. 学習成果 2. 海外での経験・3. プログラム内容・4. 進路への影響 を報告する。

1. 学習成果・3. プログラム内容

本プログラムでは、シンガポール国立大学(National University of Singapore 略称 NUS)及びYale-NUS collegeの二大学で開催されるセミナーを受講した。派遣プログラム参加者の興味関心に沿って6つのセミナーがあり、古代から現代論理学まで幅広く取り扱われた。各分野に90分から2時間程度のセミナーであったが、対話を重視する授業が多かった。いくつかの授業では、NUSの学生も出席していた。彼らは、素朴な疑問から込み入った議論まで様々に質問をしており、先生方もどんな疑問でも応えよう、と質問を歓迎する姿勢であった。そういったNUSの学生たちに刺激され、私自身も英語で質問・議論するいい機会となった。私に関心を持つ研究分野セミナーにおいては、基本事項の確認や整理にとどまらず、発展的な内容を議論できたので、自分の研究分野について新たな知見を得ることができた。また、哲学のうちでも、自分の研究分野とは異なるセミナーを受けることで、思わぬところに関連性を見つけ出したり、異なる立場を取る動機を知り得たりすることができた。私の専門分野は近世の西洋哲学であるが、同時代のアジア哲学や現代の論理学と比較検討することで、自らの研究分野にも新たな刺激となった。

また、Kyoto-NUS Graduate Workshopというワークショップで発表を行った。私は自分の研究分野であるイギリス経験論について発表を行ったが、NUSの先生から、私の議論に異なる視点から光を当ててもらうことで、新たな方向性と進展を得ることができた。英語で発表すること自体が初めてであり、言葉に詰まってしまう質問に答えられないこともあったが、良い経験を得ることができた。

2. 海外での経験

言語も宗教もさまざまな人が混じって生活しており、日本との違いを改めて肌で感じた。シンガポールが多民族国家ということもあり、食事にハラールとそれ以外を区別する表記があったり、地域によって住んでいる人の傾向が異なったりしており、各々がお互いの違いを認め合いながら、それを許容する面を見ることができたように思う。また、セミナー以外の時間にてNUSの学生と交流する機会もあり、彼らは名所や現地で有名な食事などを紹介してもらった。彼らとは専門分野に関する話や、シンガポールでの生活や文化の違いなどについても話した。

4. 進路への影響

今回の滞在において、海外の研究者と議論して問題関心を精密にしていく面白さを体感した。議論をしていくうえで、英語をうまく聞き取れない、あるいは、うまく英語で表現できない場面もあり、さらなる語学力の向上が必要であると痛感した。これまで国内の大学への進学を主に考えていたが、私自身の研究分野が英語圏で盛んなこともあり、海外の大学への進学も視野に入れたい。